

2015年1月31日(土)

場 所 アイヌ文化交流センター
時 間 10時30分より
聞き取り者 N. K

聞き手：あなた自身と石狩アイヌのことについて、お聞きします。自己紹介をお願いします。

N. K：N. K (60歳代)です。

聞き手：出身はどちらですか？

N. K：生まれは青森なんですけど…私は樺太アイヌで、昭和24年に樺太アイヌは「約束の村—稚咲内」っていうのを作ったんですよ。村というか部落ですね。…で、父親も早く亡くなりましたので、人づてに樺太アイヌがみんなで村を作っていると母親が聞いて、だったら知りあいや親戚も沢山いるし…ということで稚咲内というところに行きました。

聞き手：何歳の時ですか？

N. K：3歳の時です。

聞き手：家族構成を詳しくお聞きしても良いですか？

N. K：9人兄弟の末っ子です。私は日本に来てから生まれましたけど、私より上はみんな、樺太生まれです。

聞き手：お父さん、お母さんは？

N. K：樺太です。

聞き手：N. Kさんだけ青森で生まれたんですか？

N. K : そうです。たまたま、戦後生まれだったもんですからね。もうちょっと早かったら、樺太生まれでした。ご存知のとおり、樺太アイヌは 1933 年に日本人に同化させられましたので、それまでは国籍も戸籍もありませんでしたけれど…。

聞き手 : どうして青森に渡ったんですか？

N. K : どうして…終戦は 1945 年ですよ。そのときはもう日本人になっておりましたので、日本人は内地に帰るっていうことで命からがら帰ってきたんですよ。3 年ぐらいかけて。ですから私も青森に行って、そこで生まれたんですけど。

聞き手 : 樺太の、どのへんですか？

N. K : 西のほう、ヨーロッパ大陸のほうね。日本海側の上のほうです。間宮海峡が有るほうね。北緯 50 度線…海で育ったからね。

聞き手 : 何故、稚咲内へ？

N. K : 青森で父親が早くに亡くなったので、母親が沢山の子供を抱えて大変だ…ということで。稚内よりちょっと下がったところにサロベツ原野があります。稚内の間に「咲」という一字を入れて「稚咲内」って言うんですけどね。アイヌ語では「飲み水がない川」っていう意味。水はいっぱいあるんだよ…だけでも鉄分が強くて飲めないということで「稚咲内」。

聞き手 : 稚咲内を約束の村として、樺太アイヌをみんな呼び戻そうとしたのは誰なんですか？

N. K : 主に、真岡群広地村大字多蘭泊…って言うんですけど、多蘭泊っていうのは「サケがのぼる川」っていう意味らしいんですけど、要するに昔からサケマスふ化場があって…現在でも使われているんですけど、そこの出身者のかたが、まず最初に稚咲内に来て、そこで多蘭泊人が来て開拓部落を作ったの。それで、樺太から引き揚げてくるときに、北海道に渡ったら自分たちの村を作ろうって約束したの…それを実現したの。ですから「約束の村—稚咲内」…NHK の北海道スペシャルで 50 分くらいにわたって放送されたんですよ、20 年くらい前に。当時は、日本海側は昭和 29 年くらいまではニシンが獲れた。だから、学校に上がる前から番屋・網元をやっていたのでニシンの時期だけ出稼ぎに来るの。春になると浜の番屋に引っ越しをして、秋になると山の家に引っ越しするんですよ。家族もヤン衆もみんな引っ越しするん

ですよ。ヤン衆っていうのは…ニシンの出稼ぎに来る人のことをヤン衆っていうの。寝食を共に生活していた。大っきな番屋…素晴らしいのじゃないんですよ。天井を見れば空が見えるようなところなんです。梯子段を垂直に上って行くのね、寝相の悪い人は夜中に「ドーンッ！！」と落ちてくる。だからニシンがたくさん獲れた日は稚咲内小中学校には朝から大漁旗を屋根の上に立てて…学校休みになったら、本当は子ども達は嬉しいんだろうけど、そうではなくて暗いうちから浜に連れていかれて網の山に引っ掛かっているニシンを網から外すのを朝から晩まで手伝うの。学校に大漁旗立てて休みなんで、今じゃ考えられないよね。

小学校高学年の時に…昭和 29 年くらいまで、あんなに獲れてたニシンがパツパツ獲れなくなった。小学生でも凄いな働き手なんですよ。遊んでたらヤキ入るっちゃうか、今じゃ考えられないことがその当時はみんな普通。獲れたニシンをどうしたかっていうと、数の子とったり身欠きニシンにしたり、その残りを大きなニシン釜で炊いて魚カスを作るの。それを乾燥させてカマスに入れて、岡山県の倉敷方面に列車で送るんですよ。倉敷っていうのは干拓地で、とっても塩害があるところで、その塩害にも強い植物ということで綿花を育てていて、その綿花の肥料にとっても良かったので、どんどんどんどん出荷していたの。そうゆう綿花で軍服などを作っていたの。だから、ニシンが獲れなくなってからは最悪なんですよ。

聞き手：稚咲内には、アイヌのかたばかりだったんですか？

N. K：違うの、同じ樺太出身者でも、日本人は主に酪農。稚咲内は半農半漁。私たちも魚を獲りながら半分農家。終戦で 1945 年ごろ、アイヌも日本人も同じように樺太から引き揚げてきたので稚咲内に多くいたんです。

聞き手：日本人とアイヌの割合は、どれくらいですか？

N. K：アイヌのほうが多い。

聞き手：なんでですか？

N. K：日本人はあちこちに親戚がいたと思うけど、樺太の人は親戚とかいないわけだから稚咲内に行ったんじゃないかな？戦後 70 年ですが、アイヌから日本人にしてくれ…北海道のアイヌと同じように…と言ったわけではなく、日本人に樺太アイヌは強制的に一方的に…強制送還させられてしまったでしょ。もっと古い話をすると、1875 年には千島樺太条約によって…その時は全部の樺太アイヌじゃないんですよ…アニワ湾——北海道に一番近いアニワ湾のあたりに住んでいた樺太アイヌ 841 人は、1875

年に宗谷に移住させられました。だけれども、宗谷はあまりにも稚内に近いんですよ。だからお天気の良い日は見えるの。42~3 kmくらいしか離れてないの。ところがね、宗谷岬から利尻はね、73 kmも離れてるの。宗谷岬から利尻に行くよりも樺太に行った方がずっと近い。ですから、初代北海道長官の黒田清隆は——日本の総理大臣伊藤博文公に次いで 2 番目に総理大臣になった人なんだけれども、あまりにも樺太は宗谷に近すぎると望郷の念にかられて逃げ帰る樺太アイヌがいたら、もうその条約に違反したら国際問題になりかねないと、翌年さらに小樽に強制的に、空砲で脅してまでも小樽に連れて行ってしまっ、小樽港からまた今度は対雁っていうところまで行ったんですけどね。小樽まで行くあいだに、一人のアイヌが興奮のあまり憤死してしまったんですね。血を吐いて、よほど煮え繰り返って苦しい思いをしたんだと思うのね。そういうことがあったんですよ。そうして対雁ですね。昔は対雁——江別の発祥の地で、その当時は三重県のかただったかな？対雁に 74 人くらいの移住者がいたんだけど、当時はほとんど札幌方面にみんな引っ越しして誰も住んでいないところに連れていかれて、もっと住みやすい良い所だったら…桃源郷みたいに良いところだったら今もっと栄えていますよね。亡くなられた人を担いで埋めた。そして、その担いだ人が今度は感染して亡くなりました。約 400 人くらいの人たちが亡くなりました。残った人たちは、石狩のほうに移りました。石狩灯台の対岸側のほうに村を作って住んでいた。生き残った人がね。

聞き手：おじいちゃん、おばあちゃんのこと覚えていますか？

N. K：じいちゃんやばあちゃんのことまでしか知らないのさ。それで主人のほうの家系図を作ろうと思って戸籍を調べたの。そうしたら 6 代前まで遡れたの。明治以前…嘉永何年まで取れました。筆で書いてありました。でも、樺太アイヌのは今現在もとれないの。ほとんど戦争で命からがら逃げて来る人たち——うちの親戚も漁船で夜の夜中に逃げてきた。なんでかって言ったら、海が時化て暗闇でないと…密航しているのが見つかり、その場でソビエトの軍人に射殺されたから。それは戦後で今から 70 年くらい前ね。(母方の) おばあちゃんと姉は、樺太で亡くなってるの。そして逃げて来るときに戸籍なんか書類は燃やして来たの、だから戸籍を取るのは無理なの。ほとんど、そうなの。

聞き手：おばあちゃんの名前は、アイヌの名前なんですか？それとも日本の名前ですか？

N. K：おばあちゃんの名前はアイヌの名前なんだけれども、除籍謄本を見るとアイヌの名前になっていました。でも「J」って呼ばれてた。Oって言うんですけどね。西海岸の出身なもんだから…西海岸の人たちって「西」が付く人が多いの。うちは「N」

っていうんですけどね。明治40年になるとね、日本政府は樺太アイヌをあちこちから集めて…私たちは「多蘭泊」。

聞き手：旧姓は？

N. K：Mです。

聞き手：おじいちゃん、おばあちゃんの思い出はありますか？

N. K：おじいちゃんは〇歳（80歳代後半）で亡くなったんですけど、生活が大変だったので、もっと腹いっぱい食べさせてあげたかった。（N. Kさんが）小学4年生の時に亡くなった。

聞き手：何かアイヌのこと、なさってました？

N. K：冬になると「かんじき」作ったり、針金ワイヤーでウサギ獲ったり、背中だけ毛皮を着けてたり、イタチとか獲まえたり…冬はそういうことをやっていた。

聞き手：N. Kさんも獲りに行っていたんですか？

N. K：いいえ、遠巻きに「うわあ〜」って思いながら見ていたの。イタヤの木の枝を採っておいて——木からメープルシロップみたいな樹液が出てくるので、それを喜んで飲んでた。夏にクワガタが木について蜜を吸っているのと同じ。それは、おじいちゃんが教えてくれたりね。そして稚内はヤチ（谷地）海岸に…谷地だったの。全国でも珍しいんでないかな？…と思うんだけどね。海岸のすぐそばまで湿地帯があったということはね、湿原ですよ。山の家から浜の家まで歩いたら、春なんか雪だけ水で全然行かれないの。そういう時は磯舟で浜の家に行かなきゃならなかった。昔は、まだ道路も整備されていないからね。信じられないだろうけども。…ああ「フレップ」持ってこようと思って忘れた。フレップって、そういう谷地に生えるの。フレップって「赤いもの」っていう意味なんだけれども、「ツルコケモモ」のことですよ。谷地って、歩くと下から水が出てくるの。そのフレップをおやつにしていたの。酸っぱかったけどね。ベカンペ（菱の実）もあったの。ベカンペって、地名にもなってるんです。自然になっている野イチゴだとかハマナスがおやつだったの。稚内に母の妹がいて、子どもが亡くなったもんだから、しょっちゅうそこに遊びに連れていかれるんですよ。あとは同じ稚内でも子どもがいない家に何日も遊びに…要するに口減らしされたんですよ。私だけでなく周りの人たちもそうなんだけど、

お互いに助け合ってたの。稚内の叔母さんのところに行くと飴を食べれたの。「かわり玉」舐めていると色が変わってくるの。たまに稚内でそういうの食べると、いきなり「鼻血ブーッ！！」…ですよ、おいしいもの食べれたと思って喜んでたら、それですよ。本当にそうだったんだよ。

聞き手：おばあちゃん…Oさんは、どういう人だったんですか？

N. K：48歳くらいで亡くなったんですよ…病気で。おばあちゃん…Oさんのお母さんは、こっちの家と変わらない「チセ」みたいなところに住んでいたもんだから、夜になると囲炉裏の傍で「痛い痛い…寒い寒い…」って寝られないんだと、そういつて泣きながら夜になると囲炉裏のそばで横になって寝てたって母が見ているもんだから。母は自分が育ったこと…いろんなことをたくさん書き残しているんですよ。実際に聞かなくても読んだらわかるんですよ。たまに「一生懸命こんなこと、書いても誰が読むわけでもないのにな…」って（いうようなことも）書いてあるんですよ。私、泣きながら…ちゃんと読んでよ…泣きながら母の書き残したもの見てるの。たくさん残してるの…「樺太ではこうだった」「青森ではこうだった」稚咲内に来たら「なあんてこんなところに来たか…」砂浜に出て泣き崩れたって書いてある。目の前には利尻富士が見えて、とっても風光明媚なんだよ。だけど実際に生活していくには、とっても厳しいところだって、何にもない砂浜で…ただの砂浜なもんだから、昭和40年代になってから港を作り始めたんだけど、30年もかかった…港を作るのに。なんでかっていうと、砂が移動して歩くんですよ。海が浅くなったり深くなったり…そういうことだから、もうちょっと稚内のほうだと岩場とかがあるのでね、違うんですよ。全く何もない砂浜だから、いつとも時化てるの。

聞き手：N. Kさんのお母さんは、何歳まで樺太にいらしたんですか？

N. K：37～8歳くらいまで樺太にいたんですよ。辛くて辛くて、血を吐きながら子育てをしながら働いていたって。いつも子どもおんぶして、小学校に入っている兄たちは近所の農家に預けて、そうして休みなったら帰って来るんだってね…母から実際に聞かなくても書いてあるのを見ればわかるの。（母の書き残したものを読むと）樺太で父が街のほうまで（食料の）買い出しに行っって何日も帰って来なくて、樺太で2歳で亡くなった姉を抱っこして…樺太にナイ川ってあるらしいんですけど、その川の中くらいまで（自殺しようとして）入っって行ったらしいんですよ。書き残してあるんですけど、その時に一番上の姉が「母ちゃ～ん！母ちゃ～ん！」…って泣き叫んでるのが聞こえて我に返って、今この子とあとに残された子どもをどうするかを考え直してくれて…今、私たちが生きているのは、姉のおかげなんですよ。そ

の姉も、去年の11月の末に〇歳（90歳代前半）で亡くなりましたけれども、その時に「姉ちゃんのおかげで、今の私たちがいるんだよ。ありがとうね。」…って言ったんです。樺太や青森では食べて行けたみたいなんだけど、稚咲内に来たら知り合いがいる…樺太アイヌの仲間達がたくさんいる村を作っているって聞きつけて…その時はもう父もいないから、そこに行ったら、なんとかなるんでないか…家もあたるし、土地もあたるって聞いて。子どもたちを育てながら、そういう上手い話を聞いて…きっと飛びついて行ったんだろうなと思うんだけど、実際にはそうではなかった。そんな甘い言葉なんて、なかなか有るわけがないのにね。その時には兄たちは17歳くらいで、私は3歳くらいの時で、よく覚えてないんだけどみんなで山へ行って木を切って茅を取ってきて掘立小屋を作ったって…そこで寝て朝起きたら半分砂に埋まって寝てたって、私達。これ本当の話。

聞き手：それは、海のほうの家ですか？山のほうの家ですか？

N.K：海のほうだね。海の家と山の家は、そんなに離れてないのよ。5~600mくらいしかないのに、湿原地帯なもんだから春になると水で、もう歩かれないの。ニシン獲れなくなってから本当に大変——船が2艘あったんだけど、ニシンを獲る時に使って、それを過ぎると磯舟でもって近くの海岸で獲れたものを豊富で売って、そこからお店のご主人が自転車で小麦粉や乾麺、うどんやそばなんかを積んできて、磯舟が来るとその場で物々交換していたの。それが嬉しくて嬉しくて…飴の一つも貰えると嬉しかったの。まだ港もなかったから…夜間も船を出すことがあって、子どもの仕事は、木を拾って漁火を焚くことだったの。遊びほうけて火を消してしまったら大変…船が帰ってくるところがわからなくなるから…消してしまったら怒られた。水汲みは、井戸で汲んで天秤棒で担いでたんだけど、風が強い時は井戸が埋まってしまっ、お隣っていても遠くてビックリしたの。夏になると、ホッキ貝が獲れるのね、今は機械化されているけど、私たちの時は手作業だった、足なんかで獲ってた。貝剥きを同じ場所でやるから、貝塚みたいになるの。それを組合に出すの——自分たちで買って食べることもできないの。割れ貝とかをちょっと食べるくらい。稚咲内協同組合に出しちゃうの。貝を釜ゆでにするの。手伝いをしていると母に「絶対に食べちゃダメだよ。組合に出さなきゃいけないから絶対に食べちゃダメだよ」と言われ、「はい、大丈夫だよ（食べないから）」って言うんですけど…ところが、生干せの時…浜風に当たって何とも言えなくおいしいの。

聞き手：おいしさを知っているということは…食べましたね？

N.K：もちろん！！だって、おやつも何もないんだもん。ある日、ジャガイモなんかを作

っていたんだけど稚咲内協同組合で、「ジャガイモとサツマイモを交換します」…っていう通達が出たの、サツマイモなんて見たこともないからわかんないのさ。なんだべなあ？…って思ってたなら、親が焚いてくれたのさ。一口食べたら…びっくり！！子どもながらに、世の中にこんなにおいしいものがあったのか！！…ってびっくりしたの。ジャガイモをサッカリンで煮ていたもんだから、それとは違う味にびっくりしたの。お米が獲れない地域で「陸穂（おかほ）」も試験的に作ったんだけどダメで、ジャガイモを支給されて…種イモ用だったんだけど食べるものが無いから、みんな食べちゃうの。だから、私たちは山菜を食べてたの。エゾエンゴサクをお浸し、ごまあえ、天ぷらなんかにしたりして食べたの。花の蜜を食べたりしたの、食べるものが無かったから。アザミも食べたし…ありとあらゆるモノを食べたの。

聞き手：アイヌの儀式とか、稚咲内ではしていました？

N. K：良い質問ですね！全くなし！！全く！！なぜかと言うと…日本人になってから樺太から日本に来たから、早く日本人になりたい人ばかりだからアイヌのことを一切言わない。だけど、飲んべえばっかりだったから、一杯飲むと普段しゃべらない言葉をしゃべるの。母親はお酒を飲まないからしゃべらないけど、母親のお母さんは飲むからアイヌ語もロシア語もしゃべってたの。（子どもながらに）おかしい、なんでこんな言葉しゃべるんだろう？…って思ったの。冬になると、潮の流れによっては流氷と一緒に昆布も流れてくるの。食べるものが何もないから煮て食べたりしたの。だから流氷が来ると喜んだの。食べるものがなくて、子どもころの思い出っていったら…おじいちゃんにおなかいっぱい食べさせてあげたかったな…って、そのくらい食べ物に飢えてた。お米があれば良いんだけど、お米が獲れないから。今、郷土を掘る会に毎月、書いたものを載せてくれているんですけど…小樽に行ってもまずびっくりしたことは、まっ白いご飯が毎日食べれるの！！いやあ～びっくりしたねえ～。それまで、まっ白いご飯なんて…イモ入ってる、大根入ってる、アザミ入ってる…ご飯入ってる??…ってくらいだったから…。

聞き手：それは、一家で小樽に引っ越したんですか？

N. K：さっき話した姉が、小樽の三角市場で魚の卸売——小売や加工場も持ってやっていたもんですから、兄弟たちでみんなそこにお世話になっていたの。魚の加工を手伝ったりしてたの。すぐ上の姉は中学校に行きながらご飯炊きをしていた…けど、ほとんど中学校に行っていない。

聞き手：先にお姉さんが、稚咲内から小樽に来たんですか？

N. K : 最初は一番上の姉たちも稚咲内にいたの。その時は所帯を持ってたから、私と同じ年の姪っ子がいたの。姉たちは、稚咲内で七面鳥なんかを飼ったりしたの。でも、それじゃ稚咲内では暮らしていけないってことで、結果的には小樽に出てきて商売していたの。姉の旦那は兵隊から帰って来た人で、恩給を貰っていたから。

聞き手 : 何年くらいの話ですか？

N. K : 1958年くらいの話で、私は薪運びやら薪割りやら…全部手作業でしょ、ところが小樽に来たら、姪っ子たちは同じ年なんだけれども…なあんにもできないの。水汲みしても半分運ぶのがやっとなの。ああ、田舎育ちと街中育ちとではこんなに違うんだな…ってわかったの。そのおかげで…そういう力仕事してたから——ママさんソフトボールしていたんですけど、キャッチボールしたら相手が手を真っ赤にして「いやあ、Nさんとキャッチボールしたら手が痛くていやだ」…って言ってた。自然と身に着いたんだよね…。

聞き手 : 石狩アイヌのことについてと…石狩アイヌと樺太アイヌの違いについて教えてください。

N. K : 明治8年に強制移住させられて宗谷に来て、さらに対雁に来て約半数が亡くなって、その後に石狩に移住しているんですよ。

聞き手 : 石狩アイヌとの交流は無かったんですか？

N. K : ライサツ（来札）…死んでしまった川…ライは死ぬですよ。サツは川。その、ライサツに行ったらKさんの伯父さん、Tさん…たぶん、石狩の市役所へ行って、樺太アイヌのお墓を来札に建ててくれたんですよ。そのあたりには、樺太アイヌの亡くなった人たちがたくさん埋められていたんですよ。だから、畑を掘ると樺太アイヌのお骨がたくさん出てくるんですよ。それを集めて、Tさんがお墓を建てたって言うんですよ。ただ、樺太アイヌの文様ではなく、石狩アイヌの文様が掘られていたんだよね。

聞き手 : 北海道大学にお骨はあるんですか？北海道大学では、どんな説明をなさっているんですか？

N. K : 北海道大学で樺太アイヌに関係しているところは、清華亭のすぐそばにある偕楽園

で、第二代北海道庁長官である岩村道俊…偕楽園には明治 24 年…いろんな試験場が作られたの。例えば、ブドウ園やサケマスふ化場も作られたの。サクシュ琴似川は昭和 10 年ごろまで、サケやマスが大量に遡上していたところなの。このあたりからアイヌが使っていた丸木舟（チュブ）だとか、いろんなものが出ているんですよ。北大の中で一番奥の遺跡保存庭園に行くと、37 個の（縄文の）竪穴住居が残っているんですよ。北大では建物を建てる時に…建物を建てる前に掘るんですよ。その時に…行けるときは必ず行くんですよ、説明会などに。その時に、約 1000 年前とか縄文時代とか擦文時代だとかって説明するんですけど、私は必ず「アイヌのものではないんですか？」…って質問するんですよ。意地悪な質問ですけど…なんでって？アイヌは、どこから来たの？いきなり降って湧いてきたの？…って言いたいくらい。今現在、竪穴住居跡は明治から数えたら札幌市内だけでも約 860 基が発見されているんですよ。でも現在、目視できるのは、今、高橋はるみ知事が（住んで）いるところと、あとは北大植物園と北大の中。広い敷地の中で現在は舗装されている。琴似川沿いを歩くと、アイヌの遺跡がある。でも、掘っては埋めを繰り返しているの、掘っている現場にいないと確認できないんですよ。清華亭のとなり…偕楽園のところに、泉（メム）があって、泉がこんこんと湧き出していたんだけど、今は枯れてる。上流の伊藤組…北 5 条通りに…上流（ペンケ）。下流（パンケ）…花畔や盤溪などの名前の由来は、下流（パンケ）のことなんだよね。伊藤組のメムから続いてきて、偕楽園と合流して（サクシュ）琴似川のところ（北大の構内の中を）流れている。昭和 10 年くらいまでは、メムにサケマスふ化場があって遡上していた。その時に…明治天皇が明治 14 年に偕楽園を視察に来たの。その時に休憩所として、前年に建てられたのが、この清華亭。ここに行く于行幸したことが残っている。宿泊されたのは豊平館（今は中島公園）だった。知事公館でも竪穴住居跡は見れるし…川の跡はまだ残ってる。今は…北大構内に流れている水は、平成 14 年に（サクシュ）琴似川の復元ということで、水道水を循環させているのが現状なの。昭和 10 年くらいまでは、サケやマスがたくさん押し寄せてきてたんですよ。昔は、野生馬（野馬）を樺太アイヌが捕獲していたと言われているんです。

琴似又市さんは日本語も理解できて石狩場所（？）で通訳をしたり、皇居に招かれた際は、紋付き羽織袴でご挨拶に行った…と記録が残っているんです。なんで、ここからいなくなったのかというと、明治 11 年には行政から「主流からサケを獲ってはならん！」「木を伐採してはならん！」という御触れが出てから生活ができなくなってしまったために、明治 8 年には…岩手のほうに坂田県ってあって、そこから来た人が琴似又市さんの家には、おばあちゃんがアツシ織（オヒョウなどの木の繊維で作ったアイヌの織物）をしていたということだった。

聞き手：現在に受け継がれるアイヌの伝統文化について、教えてください。

N. K : 金田一京助は、ヤイサマを…記録に残っているヤイサマ……

ヤイサマネ～ナイ ヤイサマネ～ナイ 肝が焼けるよ わたしのとのご～ どこにあるのか そのなを くそ石狩 びんぼう石狩だということか ヤイサマネ～ナイ
(中略)

かぜになりたや～ くもになりたや～ そうしたなら～ いますぐにでも わたしのいとしいとのごにあえる～なら～ヤイサマネ～ナイ ヤイサマネ～ナイ
愛おいしい旦那さまを無理やり連れて行かれてしまって、それでも足りなくなると女、子どもも連れていかれて、様々な暴行をうけ自殺するものもいた。あまり、暗いことを話してばかりだと嫌だと思って、時々冗談を交えながら話をするけど、実際に色々あったんだよね…。

聞き手：ヤイサマとは？

N. K : 抒情詩（自分の気持ちを歌にしていた）のこと。ポイヤウンペが叙事詩。気持ちを唄うということなので、まだまだ唄を作ることはできるんですよ。

聞き手：未来に受け継がれてほしいアイヌ文化って、ありますか？

N. K : 質問とは違うかもしれませんが…樺太のヤイカテカラ（北海道のヤイサマと同じ）。伝統的なことで、N. Uさんが親戚にあたって（直接ではないが）いろんな人に聞いたり調べたりした（研究者とかに教えてもらったりした）。例えば、「エンチウ」…ってという言葉とか。例えば…「あの人、エンチウなんだよ」＝「あの人、人間なんだよ」…ということなんです。奈良県の戸津川村は…日本の2/3は森林地帯なんだけど、ここ（十津川村）は96%が森林地帯なの。明治22年に、凄い土砂災害があって、復興が無理だと言われ移住してきたんですよ。当時から「天領」と言われて年貢を納めなくて良かったんですよ。年貢を納めない代わりに天皇をお守りしていたので、北海道に移住するにあたっては国のお金をたくさん使って移住してきたの。そして、条件として「熊が出ないところ」「アイヌがいないところ」ということで…新十津川にもアイヌはいて、やっとの思いで生活していたにもかかわらず、ドロドロの山のさらに奥に追いやられたの。今から43年前に減反政策で田んぼはないと国から8万円ほどもらって…田んぼを辞めてしまったの。なぜ、この話をしたかという…そこに樺太アイヌもいたの。生活していたの！今は、カラマツ林になって…なんにもないの。それは、「郷土を掘る会」の人たちと行ってきたの。

聞き手：自身がアイヌだと言おうと思った理由は？

N. K : 自分の親や自分も苦勞してきたから。来たくもない日本に来て、苦勞して食べるものも食べれないで、米粒ひとつ残したら「目つぶれる！！」…って言われた。今は通用しないけどね。